

## 第3章 児童生徒を理解する基本的態度

### 1. 徴候の見方の相違

さきに述べたように、欲求不満が大きすぎたり、長びいたりすると、不適応の状態におちいる。その時にとる行動の状態を、一般的に徴候といっている。

徴候は、社会的あるいは教育的立場からみれば、批判されたり、非難されたりする場合が多い。しかし、そのことも、本人にしてみれば、心の中の不満を解消し、不均衡を回復するための止むを得ない手段であって、それが社会的に非難されるものであるとか、他人を困らせるものだ、ということには、全く気づいていないのである。

親や教師は、目の前の徴候に目をうばわれて、それを消失させるために、罰やしっ責などを用い、表面的には直ったと思いがいをしていることが多い。ところが、問題の根本である不適応の原因が除去されるのでなければ、また同じような徴候か、形を変えた徴候があらわれてくる。その徴候を追いかけると、堂々めぐりのような状態になり、問題をひどくこじらせてしまうことにもなりかねない。学校で、「手におえなくなった子供」というのは、このような悪循環におちいった子供であるということができる。

一般に、子供の徴候の見方について、親、教師、心理学者、精神衛生専門家の間では、どんなことを問題視しているかで、大きな相違がみられる。

これを表1で示したが、親や教師が重視するものは、表面にはっきりあらわれた行動に関するものが多く、精神衛生専門家が重視するものは、適応の機制に関するものが多いといえよう。

こういうところに、臨床心理の専門的訓練を受けた者と、そうでない教師とのちがいが出てくるのである。